

配信日：2012年6月3日

史訪会WEBニュースレター

編集人：新地比呂志

E-mail: CQB02347@nifty.com (不明点はこちらへ)

● 会員の皆様には、ご健勝のことと存じます。配信が遅れて申し訳ありませんでした。特に以前より原稿を頂いていた松田吉郎様、井上敏孝様には深くお詫び申し上げます。今後は、原稿数に関わらず配信していきたいと考えています。ライト感覚な編集方針をとりますので、A4、1枚をめどに、ご投稿をお願いいたします。次回は8月に配信させていただきます。

● 史訪会学術討論会のお知らせ

1. 日時 7月29日(日)10時～18時
2. 場所 兵庫県民会館303号室
神戸市中央区下山手通4-16-3 078-321-2131
<http://hyogo-arts.or.jp/arts/kenminmap.htm>

● 目次

- | | |
|-----------------------|-------|
| 1 台湾在外研究四方山話(その1) | 松田吉郎 |
| 2 城崎温泉の知られざる水上飛行場について | 井上敏孝 |
| 3 陳独秀「青年に告ぐ」に思う | 新地比呂志 |

台湾在外研究四方山話（その1）

松田吉郎

私は2011年7月8日～10月8日まで台湾の政治大学台湾史研究所で在外研究を行っていた。受け入れ教員は薛化元教授と李爲楨助理教授のお2人である。両先生には大変お世話になった。同期間中、政治大学の宿舎に寄宿していた。その3ヶ月間に見たり、聞いたり、考えたりしたことを述べよう。

研究テーマは日本統治時代台湾の産業組合から戦後の信用合作社、農会である。これについては改めてお話したい。

まず、同期間中の台湾、特に台北は暑かった。朝6時に起床して、政治大学のグラウンドを散歩し、体育館の電光掲示板を見ると36度である。朝6時である。日中も36度～37度、これが夜7時頃まで続いた。私は元々、暑さには強く、夏が好きであった。夏になると元気になる、活動的であった。1996年に6月1日～10月31日まで5ヶ月間台北にいた時も暑さは今と変わらなかったが、平気であった。その時は45歳、今から考えるとまだまだ元気であった。しかし、昨年台湾にいた時は60歳、還暦を過ぎていた。台湾の暑さに全くついて行けなかった。さらに7月～8月末日まで、2か月間政治大学の華語研究中心で中国語を勉強していた。月曜日から木曜日まで午後1時～4時30分まで、3時間半であった。とてもハードで予習、復習で根を上げている状態であった。3時間半の授業が苦痛で、苦痛で、耐えきれなかった。それは聞き取りができなかったということと、暑さで参っていたからであった。この中国語授業の話も別の機会に話そう。

この台湾の暑さで、滞在1週間もたたないうちに夏バテになってしまった。夏バテになるとは全く想像していなかった。華語研究中心に行って、宿舎に帰ってきて、予習復習の連日で、宿舎に引きこもりになってしまった。

これではいけないと思って、体を台湾に気候に慣れさせるために毎朝6時から1時間と毎晩6時から1時間、合計2時間、政治大学のグラウンドを歩くことにした。これがよかった。徐々に台湾の暑さに慣れてきた。

毎日、グラウンドを歩いて気づくことがでてきた。朝には2つのグループが太極拳をやっている。雨でも校舎の下でやっていた。それから、近くの叔父さん、叔母さんが歩いたり、ジョギングにきていた。私より若い人もいれば、同年代もおり、年上もいた。みんな元気である。

その中に70代後半から80代と思しき御爺さんが毎朝散歩にきていた。いつも御嬢さんに連れられてきていた。御嬢さんと言っても小生と同じか、少し若い年齢であろう。御爺さんは必ずトランジスターラジオを携帯し、それを聞きながら、散歩していた。しかし、グラウンドを半周するとベンチに腰掛け、ラジオを聞くだけである。周りの御爺さん、お婆さんとは自分から話をしない。徐々に気が付いた。どうも外省人のようである。戦後、中国大陸から兵士として台湾にやってきて、そのまま台湾に住んでいるようだ。当然台湾語

ができないので、まわりの老人と会話しな。いつもラジオを聞いているが、恐らくは大陸放送であろう。

台湾人の老人がちょこちょこと北京語で話しかけるが、その御爺さんは少し話しただけで、また、ラジオを聞く。孤独なのか、意固地なのか。

別の中年の叔父さん。小生より若い。40代か。いつも来ては、上半身裸になって筋骨隆々の肉体美を誇って見せている。何も運動しないで、周りの友人と話をしているだけ。1時間ほどしてから漸く、平均台を使って背筋を鍛える運動をする。それも短時間。終われば自転車に乗って帰る。あの叔父さんは運動しに来ているのか、肉体美を誇らしげに見せに来ているのか。

グラウンドでは大半の人は左周りで歩いたり、走ったりするのであるが、1人の叔母さん、いつも右回り。ぶつかりそうになる。それでも構わず、右回り、ゴーイングマイウェイ。

晩のグラウンドも面白い。政治大学の教員と思われる60歳前後の叔父さん。いつも汚く擦り切れた同じ服を着てきて、グラウンドを何周も走る。昔のザトペックのような機関車走法。速くはないし、スマートな走りでもないが持久力はある。しかし、ご本人はその走りに陶醉しているようだ。走り終えたら、その恰好のまま、即ち、汗まみれの服を着たまま、近くの香香自助餐に行き食事をする。香香自助餐は政治大学の正門横にあるセルフサービスの店である。友人の郭雲萍さんが政治大学で食事するなら、ここに行きなさいと教えてくれたところだ。小生も1日1回、そこで食事していた。30種類ほどの惣菜が並び、自分で皿にとって食事する。薄味で、野菜が多く、食べ飽きなかった。その主人が面白い。例えば皿を見せて値段を聞くと、「70元」のものをその主人は「700元」という。いつも10倍して発音する。しかし、支払いは70円でよい。10倍の価格を言って景気をつけているのであろうか。

政治大学のグラウンドを歩いていて一番感じたのは、大学グラウンドが地域の人々に開放的であるということである。地域の人々の運動、娯楽、社交の場所になっていることである。

今の日本では大学を含めた学校は閉鎖的である。それは仕方がない面がある。10年近く前に起った大阪教育大学附属池田小学校における児童殺傷事件。これ以後、学校では外部の人に対しては閉鎖的である。兵庫教育大学でも同じ、附属小学校、中学校には門前で朝晩、ガードマンが常駐している。大学でも夜10時～午前7時までガードマンが常駐している。大学グラウンドで近所の人がジョギングしたり、散歩したりするのを見たことがない。

日本の学校は台湾に比べて安全でないということであろう。昔の日本には「強きを挫き、弱きを助く」という「武士道」精神があった。今の日本社会には「武士道」精神は全くない。池田小学校のように大の大人が包丁を振りかざして無抵抗の小学生を殺傷する。日本の殺人事件を見ていると、自分より強いものを殺傷するのを見たことがない。いつも弱い者いじめである。殺傷自体は決してよくないものである。しかも弱いものばかりを殺傷する。何なんだ、日本人は。と言いたくなる。

学校が開放的であるかどうか、その国の平和、安全を示すバロメーターである。

城崎温泉の知られざる水上飛行場について

兵庫教育大学大学院 博士課程 井上敏孝

兵庫県にある城崎は古くから県下有数の温泉地としてその名が知られていたが、かつてこの地に民間飛行場が存在したことは、あまり知られていないのではなかろうか。今回は戦前期の城崎で建設された水上飛行場にスポットを当てたい。

1931年に兵庫县城崎で開設された日本海航空会社は、戦前期日本の航空事業を担った数少ない民間会社の一つであった。同社が拠点とした空港が、今回取り上げる城崎飛行場である。

関東大震災の翌々年である1925年5月23日に起きた北丹大震災(北但馬地震)で城崎は全町が壊滅的な打撃を受けた。しかし震災後の復興が早く、わずか2・3年で「前以上の街に回復」するまでになり、当時その復興の早さが注目された。町再建の背景には、震災当時同町の町長であり復興事業に尽力した西村佐兵衛の存在が大きかったとされる。日本海航空会社とは、復興事業の集大成として彼が「城崎温泉への観光客誘致と航空思想の普及」を目的として設立した民間航空会社であった。西村らは城崎を拠点とした遊覧飛行営業及び城崎・天橋立間の旅客運送業経営の許可申請を逓信省に出願すると同時に、航空事業に供するための飛行場建設に取りかかった。具体的には、城崎町の円山川が「水上飛行場として適当と認められた」後、同地に飛行場設備の建設が急速に進められた。ここで水上飛行場とされた円山川とは兵庫県中部の朝来市生野町円山から北流し、途中養父市・豊岡市を流れ、豊岡市北部で日本海に注いでいる一級河川である。長さは68Kmで兵庫県下5番目、流域面積は1,300km²で県下2番目の川であり、2004年の台風23号によって同川が決壊し、流域に特に大きな被害が出たことは記憶に新しい。地図を見ても分かる通り城崎温泉は円山川の河口から約4km上った同川支流大谿川沿いに広がっている。建設された城崎飛行場は、円山川水面を水上飛行場として使用するもので、実際の状況は上図の通りであった。また大規模な飛行場施設は航空機用の格納庫のみであり、同格納庫は、地図中の丸で囲んだ部分に設置されていたと考えられる。同地は約1kmの中州になっており、この場所は現在のJR城崎駅前に当たる。

日本海航空会社は、1935年の最盛期には城崎飛行場を拠点に天橋立・鳥取・松江・隠岐島・大阪を結ぶ航空路網を構築するまでに同社業務及び会社組織は大きく成長していった。

ここに『中国現代思想史資料簡編1』(浙江人民出版社)があります。巻頭は、陳独秀の「敬告青年」(1915年9月15日)です。日本では「青年に告ぐ」と訳されています。陳独秀はご存知のとおり、中国共産党の創始者です。非常に直情的な人物であり、その思想も紆余曲折していますが、その時、その時の自分に対して忠実に生きた人物だと思います。私は陳独秀の研究はしていませんが、「青年に告ぐ」の中に、非常に惹かれる文章があります。その中に次の一節があります。

自覚とはなにか。みずからの新鮮活潑なることの価値と責任を自覚し、みずから卑下しないことだ。奮闘とはなにか。みずからの良知良能を奮い、陳腐老朽なるものを仇敵、洪水猛獣と見なしてこれを排除し、断じて居をともにすることなく、その病菌をうつされぬことだ。

陳独秀の言葉の強さ、意気込みは、青年に贈ったものですが、56歳の新地にも強く感銘を与えます。自分の日々の教育実践が、陳独秀の言葉を借りれば「陳腐」なものになってしまっているように思います。決然と「青年らしく」生きねばならぬと、痛感している今日この頃です。

なお、この「青年に告ぐ」には、「自主的であれ、奴隷的であるなかれ」「進歩的であれ」「保守的であるなかれ」「世界的であれ、鎖国的であるなかれ」「実利的であれ、虚飾的であるなかれ」「科学的であれ、空想的であるなかれ」の項があり、どれも現在、日本人として読んでも、鮮烈な印象を受けます。なお訳文としては、『原典中国思想史第4刷』(岩波書店)があります。

※陳独秀の事蹟は次の通りです。

1879年、安徽省に生まれ、1942年死去した。梁啓超らの変法自強運動の政治改革の主張に影響を受けた。さらに1901年から日本に留学し、満州族の清王朝を打倒する民族主義革命の思潮に影響される。辛亥革命後、安徽省都督府秘書長に就いたが、袁世凱による強権政治を批判し、日本に亡命する。中国の現実に絶望し、1915年に帰国し、『新青年』を創刊し、伝統的な文化や社会体制が中国の近代化を妨げる元凶であるとして徹底的に否定し、儒教や家族制度を廃絶して、「民主」や「科学」といった西洋文明の原理を全面的に取り入れるべきだと主張した。『新青年』の活動は歴史上「新文化運動」と呼ばれ、胡適や魯迅など、近代中国史上に著名な作家や学者、政治家を多く生み出した。五四運動参加後、マルクス主義に急速に傾倒する。1921年にはソ連のコミンテルンの指導の下で、上海で李大釗などととも中国共産党を結成し、初代総書記に選出される。1922年頃からコミンテルンの指示で、孫文率いる国民党との合作を模索するようになり、国民党と共闘して国内の軍閥と国外の帝国主義を打倒する「国民革命」を提唱する。孫文死去後、1927年4月の上海クーデターの発生によって共産党は徹底的に弾圧される。コミンテルンからの指示に従い、武漢国民政府と連合して国共合作の維持をはかろうとするが、武漢政府の内部対立により、1927年の7月に国共合作は最終的に解体する。陳独秀は汪精衛との連合の失敗を、コミンテルンから「右傾日和見主義」と厳しく批判されて総書記を辞任する。その後陳独秀は共産党に対する激しい内部批判に転じ、コミンテルンの中国政策こそが「日和見主義」の元凶であると指弾し、「コミンテルンおよび中国共産党中央の日和見主義者と最後まで闘争しなければならぬ」と訴えた。晩年は、古代音韻学の研究に沈潜するかたわら、ときおり抗日戦争に関する見解などを発表した。特に毛沢東の、農村を根拠地とした遊撃戦の戦略に対しては、大都市を重視する立場から批判的であった。